令和4年5月15日、沖縄は復帰50周年を迎えた。

私にとって沖縄は、透き通る海と降りそそぐ太陽のもと、笑顔の素敵な人々が暮らす場所。節目の年だし、次の旅は沖縄にしようか。軽い気持ちでスマホで検索すると、復帰50周年の特集記事やサイトが目に入った。

著作権の都合上、当該部分の掲載をしておりません

PC プレス
2023 / Jan.
vol.030

Index

#001	沖縄 復帰後 50 年の軌跡をたどる	p.01
#002	［名橋をめぐって］ 目黒架道橋 山陽新幹線吉井川橋梁	p.11
#003	［明日を築くプロジェクトの風景］ 西九州新幹線	p.16
#004	［教育・研究の現場から］ 早稲田大学 創造理工学部 社会環境工学科 佐藤研究室	p.20
#005	仕事場拝見	p.22
#006	［よくわかる！PC 基礎講座］橋の役割	p.25
#007	［こんなところに PC が！］ PC まくらぎ	p.26
#008	PCニュース	p.28

社会を支えてくださるすべての方々に感謝を申し上げます

新型コロナウイルス感染症のリスクと闘いながら、命と暮らしを守ってくださっているすべての方々へ心から感謝を申し上げます。

表紙のイラスト／古宇利大橋
「沖縄～復帰後50年の軌跡をたどる」で訪ねた、古宇利大橋をイラストに描いたものです。

広報誌の名称について

PC プレス は

コンクリート（C）にプレストレス（P）の力が作用した様子を表現したもので、「プレス」は定期刊行物を意味しております。

沖縄

復帰後50年の軌跡をたどる

復帰直後の沖縄は経済成長の波に乗り豊かさ、便利さを求めインフラ整備が一気に進む。なかでも切望されたのが、本島周辺に点在する島々が陸続きになることだった。おかげで個性豊かなPC橋がそれはもうたくさん誕生している。復帰の節目の年ごとに記念イベントや観光スポットの建設、そこへ向かう道路の整備が行われ、沖縄の生活水準は上向く。同時に、沖縄ならではの自然や、受け継いできた独自の伝統や文化をもっと大切にしたいという想いも高まり始める。冒頭の復帰30周年テーマソング、BEGINの『島人(しまんちゅ)ぬ宝』が発表されたのはそんな時期だ。沖縄の中学2年生が島への想いを言葉にし、それを繋ぎ合わせてできた歌。「教科書に書いてあることだけじゃ分からない」というサビのフレーズばかりが同年代の私には輝いて見えたけれど、今聴くと景色が違って見える。

県は今後、沖縄らしい自然と歴史、伝統、文化を大切に、それを力に変えていく将来像を描いている。160の島からなり、地域ごとに異なる個性を持つ「さまざまな沖縄」をもっと打ち出していこうというのだ。

知りたい。テレビで作られたイメージじゃなく、私が知らない50年を生きてきた沖縄を。10月下旬、那覇行きの早朝便に飛び乗った。

NexTone 許諾番号 PB000053350 号

本島東岸へ一直線 那覇空港自動車道

那覇空港でそそくさとレンタカーを借りたら、那覇空港自動車道に乗って沖縄本島の東岸をめざす。この道の豊見城（とみぐすく）ICから南風原（はえばる）ICの間を繋ぐ饒波（のは）高架橋はPC橋だ。車社会の沖縄だが、街中は細くうねる道やアップダウンの激しい道が多い上、毎日あちらこちらの道で渋滞が起きている。そのため今もあちこちで拡張工事やバイパス建設が進む。饒波高架橋も、渋滞解消と南部・中部へのアクセス向上に一役買っている。慣れないレンタカーのハンドルを握る旅行者からしても、道が整うのは本当に助かる。

▲ 饒波高架橋（那覇空港自動車道）
那覇空港自動車道のうち豊見城市饒波地区を貫く、全長835mのPC多径間中空床版橋。平成15年に2車線、平成26年に拡幅し4車線が開通。当初有料道路であったが、平成21年に無料化された。

まずは腹ごしらえ。ソフトな生地で包むメキシコ風タコスに対し、アメリカ風のパリッとした生地が占領下の沖縄で定着し、名物料理に成長した。コザ（沖縄市）にある「チャーリー多幸寿（たこす）」は、復帰前の昭和31年から続くタコスの老舗。とうもろこし粉やもち麦粉などを薄くのばして焼くオリジナルトルティーヤは、パリッとした中にもちもち食感を残した、ソフトとハードのいいとこどりだ。たっぷりそぼろ状の肉を包み、ピリリと唐辛子の効いたソースはお好みで。想像よりひと回り大きなタコスは、3ピースでお腹いっぱいだ。

▲ タコス
米軍により沖縄にもたらされたタコス。米軍兵士の胃袋を満たすため、統治下で何軒も専門店がオープン。本場の味を、各店がおいしく進化させたタコスが楽しめる。

エメラルドブルーの中を駆ける 海中ドライブへGO！

海に向かって国道を東へ。県道37号線に出ると、エメラルドブルーの中に赤い主塔が映える平安座（へんざ）海中大橋が目に飛び込んでくる。沖縄初のPC斜張橋にして、海中道路のシンボルだ。全長4・75㎞の一本道は、左右に空と海が広がり気分爽快！思わず窓を開け、歌いながら疾走する。

本島と平安座島を繋ぐ海中道路は、復帰直前の昭和47年に建設された。そこに至るまでには離島苦にあえぐ平安座島の人々の物語があった。昭和36年当時、本島周辺の離島で暮らす人々は、農産物や水揚げした魚を運ぶにも、妊婦や病人を病院へ連れていくにも渡し船を使うしかなかった。商売の利益も出づらく生活は不便。人口が流出しどんどん過疎化が進む中、なんと平安座島の人々は自らバケツやザルで石を浅瀬に運び、本島につながる道を作ろうとしたのだ。島をあげて毎日コツコツ積み上げた幅20m、高さ2mの立派な土手道は、半年で1900mまで延びた。

▼ 平安座海中大橋
海中道路を拡幅した際、平成11年に開通。航路部は桁下空頭がとれて耐風安定性に優れるPC2径間連続斜張橋、両端はPC2径間連続箱桁橋として建設。平成9年度全建賞（道路部門）受賞。（写真提供：沖縄県）

▲ **平宮護岸アートコンクール**
毎年変わるテーマに沿って下絵を応募し、予選を勝ち抜いたチームが護岸に描くことを許される。友達同士でグループを作って応募でき、地域の美観を高め地域への愛着、環境保全への関心を高めることが目的。

同年9月、夢の道は大型台風の襲来により一夜にして壊される。

同じ頃、アメリカの石油会社・ガルフ社が石油貯蔵基地の拠点を探しているという話が聞こえてきた。平安座島の人々は賛否両論あったが、貧しい暮らしを抜け出すために誘致を申し入れた。「代わりに道路を作ってほしい」という交換条件をつけて。条件を飲んだガルフ社は、まず宮城島との間の海を埋め立ててオイルタンクがずらりと並ぶ石油基地にし、復帰の年に海中道路を開通させた。現在の平安座海中大橋は、海をきれいにするため、海流の道筋を作ろうと道路改修時に一部を橋梁化して架けられたものだ。

平安座島、宮城島、伊計島、浜比嘉島は今、アートによる島おこしに取り組む。平安座島に入ると、白い護岸に描かれた鮮やかな壁画が現れる。平成18年から始まった「平宮護岸アートコンクール」で、うるま市の小中学生たちが毎年描いているものだ。力強くエネルギーを放つ力作たちを見ていると、心がぽかぽかする。平成24年からは島固有の文化や自然を宝とする、「うるまシマダカラ芸術祭（旧イチハナリアートプロジェクト）」が始まり、アート、食、工芸など多様な分野の作家が島の人々と協力して作品を生み出している。サンゴ礁が生きる海、白砂の海底が透けて見えるほど透明な海水を湛えた漁港。穏やかな生活の気配に手つかずの森と、オイルタンクの対比。なるほど、作家のインスピレーションを刺激するポイントしかない。豊かな才能を引き寄せて、いつかこの島々は現代アートの母と呼ばれたりするのかも。

ウージの森をかき分けて秘密のビーチを発見

ざわわ　ざわわ　ざわわ…

平安座島の埋立地とほぼ接する宮城島。海塩のぬちまーす観光製塩ファクトリーがあるほかは、古代～中世の遺跡が多くサトウキビ畑が広がるのどかな島だ。宮城島だけの唄や踊りもあるらしい。見てみたい…。県道を逸れ、私の背丈をゆうに超えるサトウキビ（ウージ）が茂る細い道をそろそろと進む。海に向かう坂道を下ると、ごつごつした岩礁に囲まれた天然ビーチに到着！ 信じられないくらい透明な海の中へと続く道がフォトジェニックだとインスタグラムで注目を集める「ウクの浜」だ。私もアングルを変え、夢中で何枚も撮影。沖縄では当たり前に広がる浜辺の景色も、私にとっては宝物だ。この感動を共有したくて早速アップした。

ガイドブックには載っていなかった沖縄本来の魅力も、旅人ならではの目線の魅力も、誰かが見つけてはすぐに世界中に伝えられる時代。足を運びやすくなることは、暮らしやすくなるだけじゃなく一気にいろんな可能性を広げてくれる。

▼ **ウクの浜**
シュノーケリングの人気スポット、アクナ浜の北側にあるビーチ。ほぼ地元の人しか訪れないが、フォトジェニックなスポットとしてSNSで人気急上昇。

▼ 伊計大橋
昭和57年3月に開通。宮城島と伊計島を結ぶ、下路式鋼ランガー桁橋、PC2径間単純ポステンT桁橋。海中部の橋脚は環境負荷の少ないPCウェル工法を採用。

▼ 伊計ビーチと伝統漁船サバニ
入江と岩礁に囲まれた、潮の干潮が少ないビーチ。マリンアクティビティも豊富で海水浴客で賑わう。砂浜に乗り上げているのが伝統漁船・サバニ。

伝統漁船「サバニ」に出会う 終点の島・イチハナリ

昭和57年、本島から約11㎞離れた宮城島と伊計島の間がようやく繋がる。PC橋と赤いアーチが島の緑にこれまた映える、鋼のアーチ橋を組み合わせた、198mの伊計大橋の完成だ。橋の入り口ではシーサーの石像がお出迎え。本島をドライブ中、マンションや個人宅の屋根や門柱にも赤土で作られたシーサーがたくさんお座りしていたけれど、そもそもは村の入り口に大きな石獅子を鎮座させていたのがルーツだそう。「イチハナリ」と呼ばれた最果ての島に、禍が入ってきませんように。そんな橋の設計者の願いがこもっているのだろうか。

橋からほど近い伊計ビーチは、穏やかな入江の中で遊べると地元の人にも観光客にも人気のビーチ。訪れた10月はもう泳ぐ人の姿も少なかったけれど、シャワーや更衣室も整備されていて、夏なら砂浜からエメラルドブルーの海に向かって駆け込まずにはいられなかっただろう。

ここで思いがけず、沖縄の伝統漁船・サバニに出会った。昔から、漁業のほかにも渡し船として活躍していた細い木造の船のことを言うのだと、白い歯が光る管理人のおじさんが教えてくれた。島や地区ごとにサバニに乗って行うレースは、「ハーリー」と呼ばれる航海安全や豊漁を願う伝統行事で、今も毎年熱き戦いが繰り広げられているそうだ。

この日は「N高等学校」の生徒たちが、スクーリングの一環としてサバニの乗船体験に訪れていた。地元の漁業組合の方々が体験学習を引き受けているのだそう。なんてうらやましい学校生活…！ しかしこれは、平成28年に通学にとらわれない教育制度を持つN高本校を誘致した、島の人々の努力の結果でもある。本校が開校して以降、全国各地にいる在校生は必ず一度はここへ来て、伊計島のサバニに乗船し、沖縄古来の風習に触れ、またそれぞれの家へ帰っていく。それって、沖縄が受け継いできた文化風習とか、離島で生きる人たちの空気感を肌で知る若者が、全国に毎年着実に増えていくってことじゃない？ 沖縄らしい沖縄を知ってもらい未来へ残していく上で、ひとつの正解じゃないだろうか。なんだか目の前が開けて見えて、私までワクワクしてくる。

そもそも高校の誘致は、平成24年に4島の小中学校がひとつに統合され、空いた旧伊計小中学校の校舎の有効活用もめざして行われた。現在、伊計島の小中学生はスクールバスで陸続きになった平安座島の学校に通う。橋が架からなければ学校の統合もできず、N高が開校することもなかっただろう。橋は本当に、その地の行き先を大きく変えてくれる。

そうそう、沖縄の海では磯の香りがしないのだ、と太陽に愛された肌の色をしたお姉さんが教えてくれた。珊瑚礁の海は温かくて、海藻が育たないからなんだそう。マスクをずらして深呼吸すると、確かに潮の香りはかすかにするものの、海の匂いだと思っていたあの匂いがしない。沖縄は本当に、私の常識を大きく変えてくれる。

原始の森と古民家が残る琉球はじまりの地へ

さて、来た道を戻り、もう一度平安座島へ。平成9年に開通したラーメン箱桁橋、浜比嘉大橋を渡らずに帰れようか。この橋の完成でようやく4島がすべて、本島と陸続きになった。海中道路とはまた違う、海の上をふわりと飛んでいるような快感を存分に味わう。橋の真ん中にある広いバルコニーからは海中道路を一望することもできるので、橋詰広場に車を停め、徒歩で中央まで戻るのもおすすめだ。中柱には島の小学生たちがデザインした絵と手形があるのも、待望の橋だ！という喜びが伝わる。護岸アートもそうだけれど、島の大きな建造物に子どもたちを関わらせているところが、私は好きだ。

橋の開通まで30～40分かけて渡し船で本島と行き来していた浜比嘉島には、他ではあまり見かけない昔ながらの赤瓦の屋根の古民家や、石垣が続く細道が今も残る。離島の苦労を他よりも長く重ねたためか、かつて島でも指折りのエイサー集団を抱えていた島の人口はがくんと減ってしまった。浜比嘉大橋の開通後は、リゾートホテルなども開業し島に訪れる観光客数は年間2万人程度から400万人をゆうに超えるという激変の時を迎えた。その割に昔ながらの姿を残すのは、この島が沖縄でも一、二を争う神聖な島だからかもしれない。

浜比嘉島の南端、岩肌に木の枝がからみつき、人の手を拒んできたかのような場所に、108段の階段が現れる。鳥居をくぐり階段を登りきったところにある洞窟が「シルミチュー」と呼ばれる霊場だ。琉球開闢（かいびゃく）の祖と言われる男女二神、シルミチューとアマミチューが住まいとしていたと伝えられている。ここで子どもを産み育てたという伝説からか、島では訪れれば子宝に恵まれると言い伝えられており、島外からも参拝に訪れる人が多いそう。沖縄では琉球神話、琉球王朝から連なる伝承や儀式をとても大切にしている気配を、あちらこちらで感じる。島には女神・アマミチューの墓もあり、便利になっても来島者が増えても、浜比嘉島そのものが大きく変貌することは良しとしなかったのかもしれない。今となっては身が引き締まるようなこのしんとした気配を、そのまま守り続けてきた島の人々には感謝しかない。

琉球自治政府の主席をつとめ、復帰後初の知事となった屋良朝苗（やらちょうびょう）は「離島辺地と本島の間に、いささかの差別もあってはならない」との信念を胸に、昭和40年にはすでに「離島振興計画」を策定。離島架橋への道筋をつけた努力のひとつが、この4島で実っている。

海中道路からは、石油基地に石油を輸送してくる大型タンカーを横付けするための、真っ白なシーバースも見える。4島の離島苦を解消し、未来を切り開くきっかけになった石油。だけど美ら海にどうしようもなく異物感を与える人工物。人口が減るばかりだった島が息を吹き返した喜びと、人々が呑みこんできた大好きな島の自然への気持ち。『島人ぬ宝』で歌われた沖縄の人々の揺れる気持ちにも、ここに来たことで少し寄り添えるようになった気がする。

▲ **シルミチュー**
琉球神話に登場する鍾乳洞。中には霊石があり、旧正月には比嘉集落のノロと呼ばれる巫女と島の人々が、古くから伝わる三線や舞を奉納する。

▼ **浜比嘉大橋**
平成9年開通。浜比嘉島から海中大橋に続くように架かる、航路部をラーメン構造とした全長900mのPC多径間箱桁橋。橋上は全面駐停車禁止。

▲ カーミージー橋
沖縄西海岸道路のの埋め立て計画変更に伴い、平成30年に完成したPC11径間連続箱桁橋。塩害の激しい海上橋のため、大型架設作業車を用いて施工ブロック数を減らし、PC品質を確保。

「イノーをなくさないで」子どもたちに応えたPC橋

翌朝はまず、カーミージー橋・港川高架橋・牧港高架橋が連続する沖縄西海岸道路へ。朝日にきらきら光る海が、今日もドライブ日和だよと教えてくれる。実は当初の計画では、カーミージー橋付近は埋立て道路建設が行われる予定だった。しかし地元小学生による自然観察授業の結果、埋め立てをやめ、自然の浜をできる限り残す架橋にシフトした背景がある。

珊瑚礁に囲まれた浅瀬を沖縄では「イノー」と呼ぶ。浅瀬に育つ海藻は安全な産卵場として、多くの稚魚を育む。希少生物も多く住まい、なんと道路建設以前はジュゴンまでもがやってきていたそうだ。戦前はどこにでもあった浅瀬は開発と共に姿を消し、なんと本島で残るはこの浦添海岸のみ。米軍キャンプの補給基地内であったために人目につかず、ひっそりと生き残った。「生き物たちを死なせないで」という子どもたちの作文は保護者を、ついには国を動かして、埋立ては中止。イノーの生態系を残せる橋が設計された。浦添西海岸道路は内陸に並走する国道58号の、のっぴきならないほどの渋滞解消の役目を負うため、かなり整備が急がれていたと聞く。それでも時間もお金もかけて浜を守る選択をした決断は、きっと未来に大きな希望を残すに違いない。

ちなみに牧港高架橋は中央部分が鋼製なのだけど、なんと大阪で製作したものをどんぶらこと船で運んできて、一気に吊り上げて完成していたPC桁と連結するという方法が取られた。一気呵成に橋ができあがるその瞬間、ぜひ立ち会ってみたかった…！

全国に飛び立っていく沖縄生まれのものたち

鮮やかな色彩や伸びやかな絵付けが特徴のやちむんは、琉球王朝の庇護を受け、那覇の壺屋地区で大切に育てられてきた焼物だ。しかし戦後復興とともに那覇の人口が増加すると、煙による公害が問題に。復帰から2年後の昭和49年、他県を参考に策定した公害防止条例により、ついに壺屋では登り窯での作陶が禁止。ここで伝統的な登り窯にこだわる陶工たちの移住先となったのが、今の「読谷（よみたん）やちむんの里」だ。無事に受け継がれた技術は今、全国の多くの雑貨店やカフェオーナーたちを魅了し、工房が集まるこの地に買い付けに訪れる。私も軒先に並べられた作品の中に、お気に入りを発見！ 迷わず買い求め、ほくほくしながら車に戻った。

次は島や集落ごとに型が異なると聞いて、がぜん興味が湧いたエイサーを見られる施設へ。旧盆の頃なら「沖縄全島エイサーまつり」で各地本来の踊りと熱狂を堪能できる。近年は東京や大阪でチームが結成され、県外に浸透しつつあるそうだから、数年後にはよさこいやソーラン節のように、学生を熱中させるものになるのかも。力強く太鼓を鳴らし、足が上がり鋭く指笛が響く。イーヤー

▲ 牧港高架橋
平成30年開通のPC4径間連続ラーメン混合箱桁橋。桁下空頭確保のため中央は鋼製箱桁を採用し、架設中は港の環境と操業を妨げない工夫がされた。

▲ エイサー
旧盆に先祖を送るための踊りで、集落ごとに独自の型を持つ（写真は太鼓エイサー）。元々は庭で輪になって踊るものだったが、祭行列のかたちに変化。

▲ 読谷やちむんの里
やちむんの里の登り窯。沖縄初の人間国宝・金城次郎が昭和47年に読谷村に移住したことがはじまり。作家からの直接購入もできる。

サッサ！の掛け声と三線のリズムにのせられて、体の奥からどくどくと高揚感が巻き起こる。ああ、これが「ちむどんどん」か！またひとつ、沖縄の魂に触れられた気がした。

復帰直後の大イベント跡地 美ら海水族館のある海洋博公園

県道84号線・新旧の沖縄そば店が点在する沖縄そばロードに突入！コシが強く歯応えのある麺は予想以上にお腹が満たされる。復帰後、そば粉を使っていないという理由で一度「沖縄そば」の名称は禁止された。愛着ある名を存続させたいという人々の働きかけにより、昭和53年にようやく認可が下りる。何というか、制度を整えた人々の苦労がしのばれる。

▲ 沖縄そば
鰹と豚の出汁と小麦粉100％の麺で作る沖縄特産のそば。三枚肉、島ネギに紅しょうがをのせる。

さあ本日のメインイベント、美ら海水族館に到着！先ほど通った「イノーの海」の展示を皮切りに、原色の熱帯魚やジンベエザメが悠々と泳ぐ姿に目も心も奪われる。祭や祝い事の最後に必ず踊られるカチャーシーで、賑やかにイルカショーが締めくくられるのもならでは。もちろん、イルカたちが踊ってくれた。

昭和50年、復帰記念事業として日本は世界初の海洋博覧会を招致。世界規模のスケールを誇る美ら海水族館は、海洋博のシンボルであったアクアポリスの引退と入れ替わるように復帰30周年記念事業として開館し、跡地である海洋博公園に建てられたものだ。那覇空港ターミナルビルや沖縄自動車道など、海洋博に合わせて急ピッチで造られたインフラも、確かにその後の観光立県を支えている。

美ら海水族館の魅力は、本島北部への観光客をも呼び込みつつある。世界自然遺産に登録されたやんばるの豊かな森を壊すことなく、人々の暮らしが豊かになるまちづくりができるといい。10月だというのに容赦なく照りつける太陽に負けたことにして、カーブチーとアセローラフレーバーの「やんばるダブルシャワー」アイスクリームに飛びついた。

▼ 国営沖縄記念公園 海洋博公園
美ら海水族館やエメラルドビーチを目指し多くの人が訪れる、沖縄国際海洋博覧会跡地の国定公園。中央ゲートを入ると、海に浮かぶ伊江島が望める。

◀ 沖縄初のアイスクリームブランド「ブルーシール」
ブルーハワイ＆本部町限定やんばるダブルシャワー。

離島暮らしをがらりと変えた本島最長の古宇利大橋

せっかく本部半島まで来たのなら、本島でダントツに長くてきれいな橋を見たくはない？全長１９６０ｍの古宇利大橋は、スケールの大きさと美しさから橋そのものが観光スポット化。古宇利島は一気にリゾート開発が進み、人口は減少から増加に転じて観光客が50倍近くになるという莫大な効果を生み出した。「恋の島」として紹介されたことがきっかけだそうだから、恋する乙女の行動力はすばらしい。私のおすすめは、橋を間近で観察できる屋我地島側の展望所なのだけど…いかが？

静かな内海に小島が浮かぶ羽地内海を見下ろす屋我地大橋を通って本島に戻る。欄干にはめ込まれた琉球ガラスが、空と海のブルーを吸い込んで輝いていた。

▲ 古宇利大橋
平成17年開通。宮古島の伊良部大橋完成までは、県内最長を誇った1960mの長大橋。50年耐用が標準であった時代に100年耐用を目指してエポキシ樹脂塗装PC鋼線を導入するなど、新技術が積極的に使われている。

▼ 屋我地大橋
平成5年開通のPC5径間ポストテンション連続箱桁橋。チリ津波により流された初代、狭く通りづらかった2代目を経て架けられた3代目。

東シナ海の夕陽に息をのみ沖縄の家庭料理と過ごす夜

帰り道、夕日スポットとしても人気の「万座毛」に立ち寄った。散策路を進むとゾウの鼻によく似たかたちの岸壁が現れる。遠く水平線にゆっくりと太陽が近づき、あたりをオレンジ色に染めつつあった。そういえば、この海をまっすぐ進んだらどこにたどり着くんだろう。グーグルマップを見てみると、なんと私の目線の先は上海あたりらしい。本州の感覚では韓国のどこかに続いているような気がしていたけれど、ここではお隣は中国でもあるんだ。私の当たり前が、少しずつ違う。沖縄らしさを知るには、こんなささいな発見もひとつずつ覚えていることが大切な気がした。

拠点にする那覇の夜は賑やかだ。国際通りで島唄ライブを聞きながら盛り上がるのも楽しい。だけど沖縄料理を食べるなら、おじい、おばあが切り盛りしているような小さな居酒屋を見つけてほしい。泡盛をすいすい傾ける地元の常連客の中に飛び込むのは勇気がいるけれど、沖縄言葉のメニューを店主に翻訳してもらいつつ、勧められるがままに食べる一皿は何よりもおいしかった。

▼ 万座毛
海面から約20mの琉球石灰岩の断崖絶壁が立ち上がる、古くからの景勝地。奇岩と東シナ海が生み出す雄大な眺めは本島随一。

▲ ゆいレール
沖縄唯一の軌道系交通であるモノレール。平成10年からPC軌道桁の設置を開始し、平成15年に那覇空港駅～首里駅が開通。その後那覇IC近くのてだこ浦西駅まで延伸。

▲ 沖縄料理
炒め物を意味するちゃんぷるー、豚の三枚肉など庶民に根付く郷土料理。豚の各部位を使ったものが多いほか、島らっきょうや海ぶどうなど島食材を楽しめる。

首里城に託す沖縄の未来

最終日は、自分の足で那覇を歩く。

復帰後の道路整備で、沖縄の道路網は飛躍的に良くなった。けれど自動車の保有台数もまた、それをはるかに凌ぐペースで伸びたために、渋滞が慢性化。そのため空中移動できるモノレールの整備が始まった。時間通りに目的地へ着ける唯一の乗り物の登場は都市部の通勤通学をずいぶん助けたことだろう。運よく運転席の後ろに座れたので、レールをじっくり観察したらレールの大部分がPCだ。コンクリート造りの住宅地を抜け、昭和レトロを感じる国際通りのビル街を抜けると、赤瓦に白壁の建物が増える一帯、首里駅に降り立った。

忘れもしない首里城の大火は、テレビで見ていただけの私でさえ衝撃的だった。炎が夜を焦がし、シンボルが崩れ落ちる光景を実際に見ていた人々のショックはどれほどだっただろう。けれど瞬く間に復興計画が立てられ、多くの人がボランティアに駆けつけた。平成4年の復元から時が経過しており、若手への技術継承には良い機会にもなった。ついでに近年見つかった文献を元に、より在りし日の首里城に近づけようというのだから、悲劇に決して負けない強さに憧れを抱くばかりだ。復元現場は「見せる復興」として見学ルートを設けており、職人の技をも間近に見ることができる。

首里城には、かつてシンボルツリー的存在だった1本のアカギがある。沖縄戦で無残に焼け焦げたあと、アコウという別の木が古木を抱きしめるように生えて成長し、今では2本の木が一体化したような不思議な木になっている。なんだか私には、この木が沖縄そのものに見えた。

この50年、発展の影で消えそうになった沖縄らしさもあっただろう。けれど張り巡らせた交通網は、たった2泊3日で私にこれだけのものを見せ、教えてくれた。通信網も劇的に発達して、他県や世界の人が知らなかった沖縄の姿を見せる手段ができた。この2つ、昔からこの地にあったアカギを守るアコウみたいじゃない？「さまざまな沖縄」を守り、未来に残していくためのツールになれるのだ。もっと多くの人に、南国リゾートだけじゃない沖縄のいろんな顔を知ってほしい。そう強く思う旅だった。

著作権の都合上、当該部分の掲載をしておりません

▼ 首里城（復元中）
琉球王国の最高府。復帰20周年記念事業として正殿を復元。令和元年に正殿を含む9棟が焼失したが、令和8年の復元に向け奥の建屋内の作業現場を公開しながら修復が進む。

▲ 首里城のアカギ
首里城散策後、久慶門を出て守礼門に向かう途中に繁る木。小さな説明版には、昭和35年に撮影されたアカギの枯れ木の写真が掲載されている。

沖縄
復帰後50年の軌跡をたどる
旅MAP